

図書館だより

2007年10月5日発行 第3号
名寄市立大学・市立名寄短期大学
図書館運営・大学広報委員会
Eメール：library1@nayoro.ac.jp

「看護の場で人権は守られているか」 ブック・フェア開催中！！



日時：2007年9月25日（火）～10月19日（金）
9：00～19：00
場所：名寄市立大学図書館本館

2007年度名寄市立大学看護セミナー（10月6日）「看護の場で人権は守られているか」に
連携したブック・フェアです。是非、ご来館ください。お待ちしております。

* 名寄市立大学看護セミナーに関しては、名寄市立大学ホームページ「新着情報」の看護セミナー記事を
参照にしてください。→ <http://www.nayoro.ac.jp/univ/>



＝ 図書館情報検索ガイダンス ＝

下記の日程にて情報検索ガイダンスを行います。

< 栄養・看護・社会福祉 学科 >

10月2日(火)14:50～16:20

10月9日(火)14:50～16:20

10月16日(火)14:50～16:20

< 児童 学科 >

10月3日(水)14:50～16:20



図書利用方法・文献検索・情報検索のコツなど

「新着図書」です。どうぞご利用ください。

- ・ 河合隼雄著『心にある癒す力治る力 心理臨床の現場から』下巻、講談社 <本館>
 - ・ テッサ・モーリス・スズキ著 伊藤茂訳『愛国心を考える』岩波ブックレットNO.708 岩波書店 <本館>
 - ・ 『介護保険の手引2007』ぎょうせい <恵陵館>
 - ・ 松岡義和著『乳幼児の絵画指導 スペシャリストになるための理論と方法』黎明書房 <本館>
 - ・ 中村丁次編『栄養食事療法必携』第2版、医歯薬出版 <恵陵館>
 - ・ 守本友美ほか編著『ボランティアのすすめ 基礎から実践まで』ミネルヴァ書房 <恵陵館>
 - ・ 西寺桂子著『医者之死角、患者之死角 もっと豊かな医師患者関係のために』現代医学出版 <本館>
- など。まだまだ、たくさんあるよ。探しに来てね！
図書館HP蔵書検索→新着案内でも見ることができます。

この本を読もう！！



保健福祉学部教養教育部 小古間 甚一 先生より

『知的複眼思考法』

荻谷 剛彦 著 講談社、1996年9月発行 → 141.5-K (本館)

本学図書館には「荻谷剛彦」著の本が、他にも所蔵されています。蔵書検索で探してみてください。

2007年9月に中央教育審議会（文部科学省の諮問機関）小委員会が「学部教育で身につけるべき能力」の指針を示しました。そのうちの一つに「情報や知識を複眼的に分析、表現できる論理的思考力」があります。「複眼的」と言えば、本学の教養教育の理念と目標の中にも「複眼的な視点に立って思考することのできる人間を育む」とあり、この目標は本学のみならず日本の大学教育全体においても重要な課題であるのかとあらためて思いました。実は、この教養教育の理念と目標を作ったときに、いくつか参考にした本がありました。そのひとつが『知的複眼思考法』です。この本には複眼的思考を身につける方法が具体的に述べられています。「正解」という幻想を捨てること、創造的読書（批判的読書）、考えるための作文技法、問いの立て方と展開の仕方など。私流に言えば、授業で教員が学生に講義していることや本に書かれていることは「正解」ではなく、ひとつの見方・見解であると考え、ここから大学生の学習が始まるということです。大学生生活を刺激的なものにするために『知的複眼思考法』をぜひ一読してみてください。

<DVD 案内> ～ 秋の夜長は映画をみよう！！ ～

★VHS・CDも貸出しOK（「館内」シールの貼っていないもの）。7泊8日です。

ミャンマー反政府デモで邦人ジャーナリストが銃撃され死亡、沖縄「集団自決」の軍閥を否定した教科書検定問題など最近マスコミを賑わすキーワードのひとつに「戦争、紛争、テロ」などという言葉が挙げられます。私たちの住んでいる地球は、今現在もどこかで戦争をしています。身近にある映画を見て「平和」についても一度考えてみませんか。

- ・ 『キリング・フィールド』 → クメール・ルージュによるカンボジア内戦を舞台に、アメリカ人記者と現地人助手の絆がテーマ。原作はニューヨーク・タイムズの記者S・ジャンバーグの作品でピューリッツァ賞を受賞。1984年度アカデミー賞助演男優賞・撮影賞・編集賞受賞。殺戮の荒野と化した田園風景、政治的思想教育がとても怖い。
- ・ 『遠い夜明け』 → アパルトヘイト下の南アフリカ共和国で、拷問の末殺害された黒人開放活動家ビコーと地元新聞紙編集長ドナルド・ウッズの交友を描き、ウッズのイギリスへの亡命までを描いている。南アフリカでは、攻撃的な白人勢力に上映館が相次いで爆破されるという事件も起きている。後半の逃亡劇はとんでもなくスリリング。
- ・ 『ウェルカム・トゥ・サラエボ』 → ボスニア紛争中、サラエボで孤児院の少女を救出するイギリス人ジャーナリストの葛藤を描く。実写フィルムも使用されているようでドキュメンタリータッチな仕上げ。9歳の少女に、家族を捨て、国を捨て、生きる決断を迫る戦争とは何なのか。アメリカ人フリンのブラック・ジョークが秀逸。
- ・ 『父の祈りを』 → 1974年のIRA暫定派によるテロ「ギルフォード・フォー事件」が題材。パブの爆破実行犯として逮捕されたジェリー・コンロンの回想記が原作。英国の司法制度を根底から揺るがした冤罪事件、同時に父と息子の確執も描いている。アカデミー賞7部門にノミネートされたが、この年は良質な作品が多く受賞を逃す。
- ・ 『戦場のピアニスト』 → ナチス・ドイツ侵攻で強制収容所に送られたピアニストが、ゲッターの廃墟で生き延びるまでを描いている。戦争による人間の不条理な運命をも描いており、主演のエイドリアン・プロディがアカデミー賞主演男優賞を最年少で受賞した。月明かりに流れるショパンの響きが哀しい。ドイツ語の勉強にもなる？

上記の作品は、全て「実際にあった出来事に基づいて作られた」映画です。

この他に本学図書館には、『ノーマンズ・ランド』（ボスニア紛争）、『戦火の勇氣』（湾岸戦争）、『プライベート・ライアン』（第2次世界大戦）、『蝶の舌』（スペイン内戦）以上DVD、その他VHSも多数あります。